▼最優秀賞受賞作品（ジュニア部門 作文・童話等）

東京野郎の夢花火

打田卓朗

〝またいつか、一緒に花火を見よう〟

上を見た。無論、空がある。いや、別にこれ自体は至極当然のことだ。一体何の不思議があろうか。

だが――、と少年はため息ひとつこぼす。

ここは元いた街とは違う。前や後ろ、左右にまで空があるのだから。

その光景を疑う他無い。空とは、遥か上空自分達の真上に存在するものではなかったのか、と。

こんなにも手が届きそうで、もはや一緒にいるかのように感じる蒼白の空間を、果たして空と呼んでよいのだろうか。

少年は静寂に満ちた畦道を歩きながら、この町とあの街を比べていた。どうやらスクリーンに映る広告も、交通機関も、そんな機械仕掛けの音はこの空間と無縁だったようだ。

不思議なものだ。何も音がしないよりも、若葉が揺蕩（たゆた）う音の聞こえてくるほうが、よっぽど静かに感じる。

自分は、この景色が好きなのか？

四方八方に広がる自然が、今更ながら彼にそう思わせた。

いや、やめておこう。

自分はこの景色を好きになれない。なってはいけない。彼は東京が大好きだ。すぐに帰りたかった。あの街に、大事なわすれものをしてしまったから。

不意に背後から聞こえた声に、少年は振り向く。

「何をボサっと歩いとんや、東京野郎」

そこにいたのは、やや大柄なクラスメイト三人組。声の主は、その中でもリーダー格の少年らしい。

この地域特有の訛ったその喋り方は、とにかく聞きづらかった。だが不便なだけで、不快には感じない。自分は少なくとも、そう思ってやっているというのに。

「別に。ちょっと景色を見てただけ」

この共通語が、彼らには気に入らなかったようだ。

「何や、その喋り方。東京出身やからて調子乗ってんか」

少年は無視して歩き続ける。こいつらには自分を罵倒する気しか無いと知っているから。構うだけ無駄だ。

やはり、自分にはどうしても馴染めないらしい。別に自分がこの町の皆から嫌われている訳では無く、彼ら以外とは、それなりに平然と関われている。それでも、自分とこの町の皆とでは違う。いつもそう思っていた。

それが何の違いなのか。出身地？喋り方？

いや、そんなものは誤差とすら呼べない。

あと、他にあるとすれば、

「……」

少年は立ち止まった。

ここ数日は快晴が続いていたが、それでも田畑の多いこの辺りでは、道中で酷く泥濘（ぬかる）んだ場所に遭う。この地域に住む

人達、少年以外のほぼ全員が、この上を躊躇なく踏んでいき、泥だらけになって歩いていくのだ。
そう、つまりそういうことだ。
少年にはそれができない。
「田舎者」と「都会人」。
これが決定的な違いだ。出身地や言葉遣いなどの細々したものなどではない。少年とそれ以外とでは、単純に別物だった。
そんな思考の中。突然。嫌な予感が、した。
「……！」
水飛沫と共に、少年の足が土色に汚れる。
豪快な音と共に飛び散ったそれは、地面と少年の足に、一瞬の内に広がった。ギリギリのところで転ばずに済んだが、それでもその足は泥塗れだ。
何が起きたのか、少年には見ずとも解った。こうして奴らに突き飛ばされ、泥沼に飛び込むのは初めてでない。思い切り転んで全身を汚したのは、初めてここの学校に来た帰りだ。
「はははは！きったないなぁ！」
それでも、無視を突き通す。軽く泥を払うと、何事もなかったようにまた歩き出した。
少年は冷静だ。ここで突っかかったりはしない。だが、その顔には明らかな嫌悪の感情が見て取れた。
少なくとも今年を含めあと二年、高校卒業までではこの町で暮らすことになる。
いやだ。
それが素直な気持ちだった。
それでも、彼はここを嫌いになりきれない。
〝雨宮〟
そう書かれた表札の前に立つ。
今この家の中に、自分以外にその苗字を持つ者はいない。
鍵を開け、徐にドアノブを捻った。
家に入ると、半ば流れ作業のように鞄を投げ捨て、服を変えるとベッドに倒れ込む。彼は疲れ切っていた。それも、当然といえば当然だ。
ベッドで寝るのは、この町じゃあ自分くらいなものだろうなぁ、などと中身のない思考の中、少年は微睡んでいった。
――というところで、インターホンが鳴る。
少年の意識は一気に引き戻された。
慌てて起き上がった拍子にベッドから落っこち、そのままよろよろと玄関近くの機械へ歩み寄ると、
「はい」
そう短く返した。
返ってきたのは、奴らのような汚い声ではない。自分のような、暗くて無愛想な声でもない。ただただ、透き通るような銀鈴の声色で、一言。
「白縫です」
だろうな。と、少年は内心で率直な感想を述べ、ドアを開く。
日中は親が仕事でいないこの家に、大人が来ることなどまずない。それに、友達も来ない。いないから。
ただ、強いていうならば、
「こんにちは、七月。あ、あれ？　もしかして寝てたかな？　突然ごめんね」
目の前にいる、友達と言えるか否か曖昧な、クラスメイトの少女。
「あー、まぁ、寝てた。てか、こんにちはって、もう学校で会ってるじゃないか」
「あ、そっか。じゃあ……〝久しぶり〟」
さてはこいつも寝てたな、などと思い

ながら、七月は苦笑を返した。
彼が笑みを返す相手など、この少女くらいではないだろうか。それでも、彼はこの町に来てからというもの、心の底から笑ったことは一度もない。
「で、今日もだよね、千鶴」
「うん」
この少女、白縫千鶴と一緒に過ごすたった少しの時間が、七月にとっては大切だった。
この時間があるから、七月はこの町を嫌いになりきれずにいる。
二人は学校の通学路でもある、畦道を歩き出した。相変わらず、どこを見ても空ばかりの空間だ。
なぜだろうか、さっきと同じ畦道を歩いているのに、七月は先程のような嫌悪を微塵も感じない。でもそれは、きっと、
「今日は風が気持ちいいね〜」
この少女が、千鶴が、隣にいるからだろう。
七月も、この町の皆が嫌いという訳では無い。むしろ嫌いといえばあの三人くらいなものだ。
でも、千鶴だけは「好き」だった。
異性としてだとか、別にそういうのでなく。誰とも馴染めない自分に唯一手を差し伸べ、色々なことを教えてくれて、時には励ましてもくれて。それが、単純に嬉しかった。
ただ、そうしてくれた理由がわからない。
なぜ自分に？　会ったこともないのに？
疑問は転校初日から消えないままだ。
「……ねぇ、七月」
突然名前を呼ばれ、思考の彼方から引き戻される。
「な、なに？」
急な呼びかけに慌てて返事をしたため、少しぎこちないような。千鶴はそんな七月に対し、少し言いにくそうに。
「……今度、学校のすぐ近くの神社で花火祭りがあるの」
「花火……」
七月は、その単語に懐かしさを感じた。あの東京での、大切な記憶。
もうどれほど前なのかは覚えていない。幼馴染の女の子と一緒に、大規模な花火祭りに行った。
その子とは、ずっと一緒だった。だから、悲しかった。その子が田舎へ引っ越していってしまったことが。
あの花火が、自分たちの最後の時間だった。
そして、悔しかった。幼いころからいつもあだ名で呼んでいたせいで、その子の本名を知らないことが。互いにそうだったから、仕方ないのかもしれない。でも、名前がわからなくては、もう会えない。
それに、もし、その子がいま自分と同じような目に遭っていたら……。
だからこそ、あの東京へ帰りたい。ここが嫌いなんじゃない。東京が好きなんだ。
だが、七月のそんな意識を、千鶴がここへ繋ぎ止めている。
「ねぇ、七月、聞いてる？」
その声に、また、七月は引き戻される。
「あぁ、聞いてるよ」
「一緒に、行きたいなって思って」
語尾が、どこかか弱かった。
いままでこうして一緒に話したり歩いたりしてきたものだが、特にどこかへ一緒に行ったことはない。だから、嬉しかった。千鶴から何かに誘ってもらえたことが。きっとこの子となら、この町でも色々と楽しめるだろう。そんなことまで思い描いて。それなのに、
「ごめん、少し考えさせて」

そんな返事をしていた。
本当は嬉しいはずなのに。そうだ。だって七月は、千鶴のことがこの町で一番好きなのだから。でも、あの日の別れが、悲しかった。あの日の花火が、頭から離れなくて。どうしても、怖かった。花火を見ると、もっと帰りたくなってしまうかもしれない。この町を、嫌いになってしまうかもしれない。そうなってしまったら、もう千鶴とは、一緒にいられなくなる。
「……そっか」
千鶴も断られたわけではないとわかっている。そう、自分に言い聞かせただけかもしれない。でもその声色は、少し悲しそうだった。
それ以降は花火のことに触れず、ただ他愛もない話をしながら畦道を歩き、やがてそれぞれの家に帰った。
千鶴は、彼を気遣っていたのだろう。いつもより笑い、でもいつもよりぎこちなかった。
「なつ君、花火すっごいきれいだったね」
「……うん」
屋台の並ぶ道を、七月と幼馴染の少女が歩いていた。もうそれらは既に片付けに入っており、人は詰め込まれたように多いが、それでも始まった頃よりは随分と少ない。
終わってしまうんだな。そう思った。
祭りが、ではない。もちろん祭りは終わる。でも、もっと大事なものが、今日で終わってしまうんだ。
「ねぇ、なつ君」
「……」
七月は、何も言わなかった。言えなかった。何かを言ってしまったら、それだけ最後が近づく。何も言わなければ、この子は一緒にいてくれる。なんて思っていたのかもしれない。
「……約束」
少女が、静かに静寂を破る。
少年はそのたった一言に動揺し、目を見開いた。
やめろ。やめてくれ。
そんなことを言ったら、本当に終わってしまうみたいじゃないか。この時間を、終わらせないでくれ。
だが、そんな願いは届かず、
「またいつか、一緒に花火を見ようね」
「……うん」
「いつか」。そのわずか三文字の存在感が、あまりに大きかった。
「……じゃあね。……なつ君」
「……！」
俯(うつむ)けていた顔を振り上げる。うそだろ。もう終わりなのか。
少女は人ごみに呑まれていく。
いやだ。もっと一緒にいたい。
全力で、手を伸ばした。
「待ってくれ！　ちぃ！」
そう叫びながら、目を覚ます。
暗い部屋のベッドの上で、蹲(うずくま)っていた。
「ゆ、め……？」
息が荒い。あの夢がそんなに怖かったのか。
「……はぁ」
この町に来てから、何度目とも知れないため息をこぼす。
……こんなのでどうするんだろ、俺。
もはや呆れていた。小学生の頃を、七年も経って未だに引きずっている。
その事から逃げたくて。何かに縋(すが)りた

くて。
これだけはずっと憶えている、あの子の〝あだ名〟を口にした。
「〝ちぃ〟、ごめんな。約束、守れそうにないや」

何日か経ち、花火祭りの日が近づいてきた。決断は、できていない。
「なぁ、千鶴」
「なあに？」
今日もまた、千鶴と畦道を歩いている。
花火のこともあって喋りづらさはあった。
「千鶴ってさ、どうして」
それでも、今日こそは、訊こうと思った。
「どうして、俺を助けてくれるの？」
その質問に、彼女は首を傾げる。
「どうしてって……別に助けてるつもりもないんだけどなぁ……」
千鶴らしい答えだ。そう思って少し微笑む。「じゃあ、どうして転校初日から、こんなに仲良くしてくれるの？」
「あぁ、そういうことか」
納得がいったようだ。首を二、三回縦に振ると、少し微笑んだ。
「七月って、まだ周りの皆とうまく関われてないみたいだけど、私もそんな時期があってね。ちょっと、親しみを感じたというか……」
そう言って少し含羞（はにか）みながら微笑む少女の姿が、いつもより可憐に見えた。その姿に、少し心が和らいだような気がして、
「じゃあ、花火はどうして？」
あれからはじめて、「花火」と口にした。
心に纏わりついていた何かが、なくなった気がする。その問いかけに千鶴は足を止め、静かに微笑みながら、
「……花火が、好きなの」
答えは、ただただ単純で、簡潔だった。
「そっか」
この子は、やはり自分を思ってくれていたのだ。だから、あれだけ親しく接してくれた。
そして彼女が言うように、自分たちは何かが似ている。やっぱり、この子と一緒なら、怖くないかもしれない。千鶴に向き直って、先程より少し大きく微笑んだ。
「行こう、花火」
まさか、自分がこんなに微笑むなんて。

一応、浴衣を着てきたものの、やはり慣れないものだ。そもそも丁度家にあったのが意外。などと考えながら、千鶴を待つ。
一分程で、カツカツと下駄の音が近づいてきた。
「こんばんは、七月」
もう学校で会ってるじゃないか、なんて思ってしまい、数日前の会話を思い出す。ここに来る約束をした日だ。それがなんだか可笑しくて、大きく微笑みながら、
「こんばんは」
なんだか、笑うことにもすっかり慣れちゃったな。浴衣のほうが慣れないくらいだ。
「花火、そろそろかな」
千鶴の一言で、はっとする。もう花火を見ることに不安なんてない。それでも、やはり少しドキドキしていた。
少し複雑な思いを抱きながら、千鶴と空を見上げた。ちょうどまさにその瞬間。
「――――」
自分は、泣いていたらしい。
七月がそう気付いたのは、最初の花火

が散った直後だ。
続けて何度も、夜空が彩られた。
東京よりは、規模が随分小さい。それでも、
「花火って、こんなにきれいだったんだ……」
そんなことを口にしていた。
「ほんと、すごくきれいだね」
花火の明るさ、花火の咲く音、夏の温度、千鶴の声。その全てが、体中に溶け込んでいく。堪えようのない幸せが、彼の心を満たした。小さな花火だけれど、七月と千鶴にとっては、なによりも大きく見えた。
この花火を見れて、本当によかった。
千鶴と出会えて、本当によかった。
この町を、好きになれたよ。
この景色を、君に見せたかったな。
たとえはなれていても、どこかできっと、同じこの空を見ていてくれるよね。
全ての花火が上がり、二人は神社を後にしようとしていた。互いにさっきの花火を思い出し、もはや何かを語り合う必要もなく。
だがそんな中、七月は迷っていた。この気持ちを伝えるかどうか。昨日気が付いて、今日も散々考えて、気が付いたこの気持ち。今まで千鶴が自分にしてくれたことや、かけてくれた言葉の数々を思い出し、さっき、やっと確信した。
千鶴がそれに気づいているかはわからないけど、どうしても、この思いを伝えたかった。
でも、言ってしまったら、千鶴との関係が変わってしまうかもしれない。だから、ずっと迷っている。本当に、言うべきなのだろうか。
正直、言いづらさがあった。
でも、やっぱりそれ以上に言いたかった。
千鶴の手を取って、勇気を振り絞り、その一言を口にする。サプライズで残っていたらしいラストの花火が、同時にあがった。
「約束、守ってくれてありがとな！　ちぃ！」
やっと、出会えた。ずっと、逢いたかった。
いつも心の中にいた子が、いま隣にいる。
それだけで、すごくうれしかった。
「あれ？　なにか言った？」
「ははっ！　なんでもない！」
少年は、この町に来てからいちばんの微笑みを返した。
言えたから、逢えたから、今はそれでいい。
それ以上、望むことなんてない。
ありがとう、君のおかげで、東京も、この町も、花火も、全部好きになれたよ。
ちぃだけは、〝大好き〟だけど。
「来年も、一緒に見に来ような」
「うん！」
来年だけじゃ、ないけどな。